

# R. H. Blyth の禅について

杉本京子

日本大学大学院総合社会情報研究科

## About R. H. Blyth's Zen

SUGIMOTO Keiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

R. H. Blyth (1898-1964) was a professor of English literature in Gakushuin University and other Japanese colleges, and had been studying Zen Buddhism, Haiku and Senryu. He was said to be a main contributor to the familiarization of Europeans with Japanese Haiku. He was an ardent follower of Suzuki Daisetz all his life, though it seems that his works on Zen Buddhism are not highly evaluated. One of the reasons is that it is difficult to understand his real intention. So I tried to make his true meanings clear.

---

### 1 日本人に忘れられたブライス

Reginald Horace Blyth (1898 1964)は俳句や禅を欧米の人々に紹介した人として欧米では広く知られているようである。しかし日本では、今は半ば忘れられた存在になっている。

俳句の研究で昭和 29 年に東京大学から博士号を授与された人<sup>1</sup>、終戦直後、昭和天皇の「人間宣言」の草稿を書いた人で、今の天皇の家庭教師を 20 年近くも勤めた人だと言うと、えっ！ほんと、そんな人いたの？という顔をする人が多い。ヴァイニング夫人なら知っているけどと、たいていの人は言う。最近、去年話題になったジョン・ダワ の『敗北を抱きしめて』に出てきたという人もいる。私自身、上田教授からゼミで話を聞くまでは全く知らなかった。

戦前は京城帝国大学で、戦後は学習院を始め、東大、日大、東京教育大、実践女子大、早稲田など多くの大学で教鞭をとっているにもかかわらず、ブライスの思い出を語る人は少ないようだ。ブライスが亡くなった時、追悼号を出したのが日本大学だけだというのも寂しい。<sup>2</sup> 平川祐弘によると、昭和 20 年代

にブライスは東大英文科に講師できていて、彼の英文学史は必修科目であった。その頃学生だった人たちに聞いてみると、単位は取ったが特別の思い出はないと「冷淡な返事する人が多かった」とのことである。<sup>3</sup> 平川祐弘は、このことをブライスがあまりにも old Japan hand 「日本通」であり過ぎたことに依るのではないかと語っているところが面白い。戦後本郷の英文科にイギリス政府から特派された詩人ブランデン氏やオーストラリアから来た F. M. ウィルソン氏は「いかにも高雅な別世界から桂冠詩人として壇上にあらわれた、という隔絶した距離感をもって私たちを魅了した」。それにひきかえ自転車で学校にきて「くすんだ緑色の風呂敷を開いて授業を始める」ブライスには「別世界の夢」はなかったと語っている。「英文科の学生たちにはブランデン氏こそ醇乎たる英詩の伝統の光栄に輝く正統の貴人であるのに対し、ブライス氏はこともあろうに英詩を英詩として読むばかりか、和歌、俳句、漢詩、川柳ごときものと比較対照するという、学問のあるべき枠からはみ出た野人のように思われていたのである」と当時の学生の気分を分析している。戦後間もなくの英文科の雰囲気としてはさもありなんと思わ

---

<sup>1</sup>1954(昭和29)年 *HAIKU* 全五巻により東京大学より文学博士号を授与され、1959(昭和34)年勲四等瑞宝章授与される。

<sup>2</sup> 日本大学『英文学会会報 R.H.ブライス先生追悼特集』

1966

<sup>3</sup> 平川祐弘『這い和の海と戦いの海 二・二六事件から「人間宣言」まで』講談社学術文庫 1993 p201

れる。

つい最近出版された工藤美代子『ジミーと呼ばれた日 若き日の明仁天皇』という著書のなかにこの頃のブライスが登場する。<sup>4</sup>

この本は皇太子とヴァイニング夫人のことを書いたもので、彼女は単に皇太子の家庭教師であったにとどまらず、天皇家一家と長い間心の交流があったことを語っている。終戦後マッカーサーの天皇制存続の方針は一応決まったが、戦前のような権力を天皇に持たせないため、皇族の財産上の特権が剥奪された。直宮を除く全ての宮家は臣籍に降下され、皇族や華族制度は変わった。こうした新しい時代の中で生き延びるため天皇は、皇太子の教育について考えるところがあったのであろう。天皇は「誰もが驚く思い切った拳にでた」<sup>5</sup>と著者は書いている。

1946(昭和21)年3月アメリカから教育使節団の一行が来日した。団長はニューヨーク州の教育総監ジョージ・ストダート博士であった。いうまでもなく、この使節団の来日が戦後民主教育の出発点となる。3月26日に天皇は一行を招待した。この席で天皇が直接、ストダート博士に皇太子の家庭教師を捜してもらえないだろうかと尋ねたそうである。「ストダート博士は一瞬、虚をつかれたという」と工藤美代子は書いている。それから一週間後に学習院長の山梨勝之進が天皇の使者としてストダート博士に会いにいった。その時天皇の希望として、その家庭教師の条件が提示された。<sup>6</sup>

「50歳位のアメリカ婦人で、キリスト教徒であったとしても、ファナティックでない人物が良い。また、いわゆる日本通ですでに日本に関して造詣の深い人よりも、初めて日本に来る人を望んでおり、日本語はできないほうがむしろ好ましい」<sup>7</sup>というものであった。

<sup>4</sup> 工藤美代子『ジミーと呼ばれた日 若き日の明仁天皇』2002年4月10日恒文社21

<sup>5</sup> 工藤美代子前掲書 p72

<sup>6</sup> 天皇の示した条件は、年俸2000ドル、専用の家、必要なスタッフ、自家用車を準備するであった。私は、去年宮内庁にブライスの給料はどのくらいであったか情報公開を求めたが、回答は「不開示 理由 文書が存在しないため」であった。

<sup>7</sup> 工藤美代子前掲書 p75～76

おそらく山梨勝之進の推薦だったと想像するが、このときブライスはすでに皇太子の家庭教師であった。工藤美代子は「故意か偶然か分らないが、天皇が望んだ新しい家庭教師像というのは、このブライスとは、まさに反対のイメージだった」と書いている。ここでも、ブライスのあまりにも日本通であり過ぎたことが、好ましくないイメージとなっている。

帰国したストダート博士は家庭教師選びのことを記者会見で発表したところ応募者が殺到したそうである。その中から選び抜かれたのがヴァイニング夫人で、皇太子ならびに学習院中等部の教育に力を尽くし天皇、皇后に気に入られた。またマッカーサーも次の天皇になる皇太子の成長ぶりを見て、ヴァイニング夫人の教育を賞賛した。ところが、ヴァイニング夫人の業績を賞賛する人が多ければ多いほど「彼女の名声を非常に複雑な思いで見ている人々もいた」<sup>8</sup>というのである。

それはイギリス政府代表部(後の大使館)の人々であった。イギリスの政府代表アルバリー・ガスコイン卿は、ブライスに代わるイギリス人の家庭教師を考えていた。マッカーサーのブライス評は、英語が訛っているとか、心情も外観もイギリス人らしくないとかあまり芳しくなかった。ガスコイン卿は「英国生活や流儀をあまりしらず、長く英国を留守にして、戦争へさえも行かなかったような人間によって英国が代表されるのは耐え難い」<sup>9</sup>とマッカーサーに語ったということである。イギリス流の王室のあり方を日本の天皇家に持ち込もうとしたイギリスの理想からすれば、このブライス批判もよくわかる。

このように見てくると、戦争から解放された時、天皇から庶民まで欧米の文化に対する強い憧れがあったことがよく分る。それはマッカーサー、ヴァイニング夫人、詩人のブランデン氏、F.M.ウィルソン氏というような、別世界からこの荒廃した焼跡に舞い降りてきたような、畏敬の念を抱かせる人に求められていたのである。それに引き替えブライスは、下駄ばき、くすんだ緑の風呂敷づつみ、自転車、ぼさぼさの髪に構わぬ身なり、巧みな日本語で俳句や

<sup>8</sup> 同書 p157

<sup>9</sup> 工藤美代子前掲書 p169

川柳の話。パーティに招かれても、肉食主義の彼は、海苔巻と、おいなりさんしか食べない。天から舞い降りてきた外国人のイメージとは縁遠く、焼け出されて、食うや食わずの生活をしている日本人とあまり変わらないという印象で、憧れの対象にはならなかったに違いない。実は、ブライスは太平洋戦争が始まったその日(昭和16年12月8日)から、敗戦のその日(昭和20年8月15日)まで、神戸の交戦国民間人俘虜収容所にいたのだ。そこでの生活はどんな苦難に満ちたものであったかは想像するしかないが、解放された時栄養失調から吹き出物がたくさんできていたという。その頃大人たちが「あいつらは、食べ物が違うからなあ」と、体格の良い外国人をみると、日本人は何をしてもかなわないという劣等感を込めて言うのをよく耳にした。栄養失調の外国人は尊敬するに値しなかったかもしれない。

ブライスは *Zen in English Literature* の Preface に次のようなことをかいている。

It is to be feared that this book may fall between two (or more) stools, since it is addressed, on the one hand, to English readers who know much of English Literature and nothing of Zen, and on the other, to Japanese readers who know a little of both.

ブライスは、この本が「fall between two stools」、イギリスの読者と日本の読者の椅子の間に落ちる、つまりどちらの読者からも読まれずに終わるのではないかと危惧しているが、ブライス自身が、あまりにも日本文化通の外国人であったために、イギリス人と日本人との狭間に落ちて、どちらからも重きを置かれなかった状況があったのではないかと思うと、気の毒でならない。

## 2 鈴木大拙と *Zen in English Literature and Oriental Classics*

ブライスは京城帝国大学に職を得て間もなく、1927(昭和2)年に出版された鈴木大拙の *Essays in Zen Buddhism, First Series* を読み深く感動し、

以来鈴木大拙の禅の熱烈な信奉者となった。1938年から京城の臨済宗妙心寺別院で坐禅を始めている。そこで華山大義老師の『無門関』や『毒語心経』の講義に熱心にかよった。1938(昭和13)に鈴木大拙の *Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture* が出版され、ブライスは大変影響を受けたという。<sup>10</sup> 彼の最初の著作 *Zen English Literature and Oriental Classics* <sup>11</sup> は、大拙の禅に触発されて書いたものであると、著者自ら Preface で述べている。

平川祐弘はこの書のことを「北星堂が出した奇書」と呼んでいる。<sup>12</sup> 「奇書」というのは辞書を引くと「世にも珍しい内容の書」とある。禅の精神をイギリス文学や聖書、ドン・キホーテなどにみようというのだから「奇書」と呼ぶにふさわしいだろう。平川祐弘はその意味のほかに、昭和17年の12月に、英語でイギリス人が書いた本が日本で出版されたことが奇蹟のようだという意味をこめて「奇書」という言葉を使われているのではないかと思う。

真珠湾攻撃から一年、ミッドウエー海戦を転換点として、日本の戦局は暗転し始めていた。ガダルカナル奪回の失敗と放棄、ニューギニアのバサブア島での玉砕など日本軍の後退が目立ち始めていた時期である。

昭和16年「言論出版集会結社等臨時取締法」の公布によって、本格的な言論弾圧が行なわれるようになっていた。図書に関しては、出版条例によって内務省の販売領布禁止権が認められ、同省への発売日前の納本が義務づけられた。出版物の検閲が強化される一方で、敵性語追放も昭和15年頃から始まっており、17年には、高等女学校の必須科目から英語ははずされた。

このような状況のなかで、イギリス人の英語で書いた書物が、出版されたということは奇蹟としか言いようがない。この本が出版された時にはブライスはすでに神戸の交戦国民間人俘虜収容所に入れら

<sup>10</sup> この京城時代のことは『回想のブライス』のなかにある、京城帝国大学の同僚だった小西英一や新木正之介の回想によるところが多い。

<sup>11</sup> 1942(昭和17)年 日本北星堂書店より出版。

<sup>12</sup> 平川祐弘前掲書 p162

れていたのである。開戦前に原稿を預かっていて、この狂気じみた言論弾圧のなかで出版した北星堂書店の店主の勇氣に私は感心する。

当時この本がどのように読まれたかを示す挿話が『回想のブライス』<sup>13</sup>の中にある。神戸の俘虜収容所にグアム島から連れてこられたアメリカ人がいたが、その中の一人エイトケン<sup>14</sup>という人が収容所での思い出の一文を寄せている。

まだエイトケンがブライスと同じ収容所に移される前のことである。(神戸に何箇所があった民間人俘虜収容所は、昭和19年5月に一箇所に集められ175人が収容された。ここでエイトケンはブライスとめぐり合うが、これはそれ以前のことである。)

「ある晩、かなり酒に酔った一人の監視人が私の部屋に入ってきて、一冊の本を高く振りかざしながら英語で言った。“この本はな、俺の英語の教師が・・・”。この男は、金沢でブライス先生の教えを受け、学徒動員で駆り出された四高生だろう。出版されたばかりの *Zen in English Literature* を背囊の中に忍ばせて持っていたのだ。英語の本を持っていれば、それだけで処罰を受ける可能性もあった。新兵ではそうそう本を読む時間などなかなか見出せなかったかもしれないが、それでも英語の本を手放せなかった勉強好きの若者だったに違いない。この青年はこの後どうなったかわからないが、エイトケンはその本を無理に頼んで貸してもらいむさぼり読んだという。すっかり暗記してしまうほど「10回ないし11回通読し」、人生の指針となるほどこの本から多くのものを与えられたと語っている。「この書物によって現在、私が歩んでいる人生の方向が決定されたのであり、文化、つまり文学、美術、そして音楽に対する私の見方は、元をただせばこの一冊の書物にまで遡るのである」とまで言っている。

<sup>13</sup> 川島保良編『回想のブライス』回想のブライス刊行会1984(昭和59) ブライス没後18年経って、京城帝国大学時代の同僚、友人、教え子などが作ったもので非売品。

<sup>14</sup> Robert Aitken ブライスから鈴木大拙のこと聞き、戦後大拙の下で学び、後にハワイで禅道場 Diamond Sangha の老師となった。岡村美穂子・上田閑照『大拙の風景 鈴木大拙とは誰か』p133にそのことが書かれている。

戦後の欧米でこの本が読まれた様子を、宗片邦義は次のように書いている。

In the early 1950s, *Zen in English Literature* and the four volumes *Haiku* (1949-52) were widely circulated among enthusiastic readers in areas of America and Europe, especially California and Paris. Aldous Huxley writes, “There is a very curious book by a man called R.H. Blyth, called *Zen in English Literature*. Blyth is a professor at some Japanese university and has lived in that country for many years. The book deals with the relation between moment-by-moment experience of Things-as-they-Are [and] Poetry. It is a bit perverse sometimes, but very illuminating at others” (Letter to Elise Murrell, 4 November 1951). In the *Sunday Times* in 1958, Huxley mentioned Blyth’s book as his favourite.<sup>15</sup>

日本では北星堂書店が、1996年6月に版を改め、60年後の今も出版し続けている。まだ日本語の翻訳はないが、いまだに国内外に愛読者がいるということだろう。

この本の表紙には、英語の題のほかに「禅と英文学」という日本語が書かれ、丸、三角、四角が横に並べて無造作に描かれている。この丸、三角、四角は仙崖<sup>16</sup>の描いた図柄であるが、大拙はこれに“Universe”という題をつけ次のような解説を書いている。「この円・三角・四角は仙涯の宇宙図である。円は無限を表す。無限は全ての存在の根底にある。しかし無限そのものには形がない。感覚や知性を与えられている我々人間は触れることの出来るような形をもとめる。従って、三角形。三角形は全ての形の始めである。そこから先ず四角(正方形)形が現

<sup>15</sup> Edited by Kuniyoshi Munakata and Michel Guest *Essentially Oriental R.H. Blyth Selection* THE HOKUSEUDO PRESS, 1994

<sup>16</sup> 仙崖義梵(1750-1837)江戸後期の臨済宗の禅僧。書画を多く残し禅の真髓を平明に説くため描いた独得の禅画は海外にも紹介されている。

われる。四角形は三角形を重ねたもの、二重にしたものである。この二重化の過程は限りなく進み、おびただしい多様な事物があることになる。中国の哲学者が言うところの〈万物〉であり、即ち宇宙である。<sup>17</sup> 大拙自身はさらにこの図を縦書きにし、四角と三角を重ね、その下に「不異」と漢字をいれて、その下に丸をかく。これは、『般若心経』の根本思想「色不異空・空不異色」を表わしたものだとして説明している。つまりこの表紙の図柄は禅の宇宙観を表わしたものである。但し、この図柄を表紙にしたいと、ブライス自身が希望したかどうかは分らない。

宇宙空間について、鈴木大拙は馬遠の「寒江独釣図」を見て、小舟が頼りなげに、荒れ狂う波間に浮かんでいる。「この頼りなさこそ、この漁舟の美德であって、これと対照して我々は小舟と一切を取り囲む絶対なるものの無限を感じるのである」と言っている。<sup>18</sup> ブライスもまたこの絵について次のように述べている。<sup>19</sup>

It is a picture of a fisherman intent on the work among the rushing waves, if we think that the work is arduous, that man faces the elements with courage, this is morality. If we think of the spacing of the picture, this is beauty. If we think of the justness of the drawing, this is truth. If we think of it as a symbol of humanity and nature, man and universe, this is religion. And if we think of loneliness, or repose, or the Infinite, we are not thinking of the picture at all, we are thinking about ourselves, our own emotions.  
p270

ブライスはこの絵を禅の立場から次のように見ていく。

We must look at the picture so that, *what it is*

<sup>17</sup> 前掲『大拙の風景』p46 47

<sup>18</sup> 『鈴木大拙全集第11巻』岩波書店1999 p18

<sup>19</sup> *Zen I English Literature* p270 以下同書からの引用については、ページ数を文末につける。

*speaks so loudly we cannot hear what it says. What the picture is, gives us rest; so long as we do not think of the meaning, we have the same active rest, rest activity, as the artist had at the moment he painted the picture.* - p270 (イタリックスはブライス自身による)

このことを具体的に言うと、荒波にもまれる小船を、全神経を集中して必死で操っている男の身になってこの絵を見ていると、この男は荒れ狂う波のものすごい唸り声は耳に入らず、縄で傷つけた指の痛みや背中に食い込むロープの痛さも気にしている暇はない。頭上には灰色の空、下は灰色の広漠たる海、見ている者もその男とともに、翻弄される小船に身を任せていると、

...the middle of the void, all this in a timeless moment, and afterwards, "Am I a man who dreamed he became a picture, a picture dreaming it is a man?" - p 271

虚空の中で時間は止まり、この絵の中の男と自分とは一体化してしまい、自分が絵に中の人物になった夢を見ているのか、男が見ている夢の中に自分が入り込んだのかわからなくなるというのである。

最後の quotation mark の中の二行は、明らかに荘子の「不知周之夢為胡蝶與、胡蝶之夢為周與」の言い換えて、「胡蝶」を"a picture"に置き換えたものだ。自己と物、主体と客体の完全なる一体化をブライスは言おうとしているのだろう。大拙も荘子を愛し、よく引用しているが、そもそも中国における仏教経典の受容に際して、訳語をはじめその大きな思想基盤になったのは老荘の思想だそうである。<sup>20</sup>

鈴木大拙は「禅の本分」を次のように解説している。

「改めていうまでもないが、禅の本分は、物自体、あるいは自我の本源、あるいは自心源、あるいは本有の性、あるいは本来の面目...さまざまの名目はあるが、つまりは自分自身の奥の奥にあるものを、体得するところにある。単なる概念的把握でなくて、感覚の上で、声を聞いたり、色を見たり、香を嗅ぐな

<sup>20</sup> 岩波仏教辞典 荘子の項

どするように、心自体が自体を契証する経験である」。この場合見るもの見られるもの、聞くもの聞かれるものと相対峙するのではなく、見るものが見られるものであり、心自体が物自体であると言っている。<sup>21</sup> プライスは大拙のこのような思想を、馬遠の絵の見方に取り入れたのであろう。

鈴木大拙に suggest されたことだが、と言ってブライスは次のように書いている。

Truth lies *beyond* the extremes, not in the middle; is beyond good and evil, not partly both. Or express this in another way, suggested to me by Prof. Suzuki, in connection with "seeing into our own nature," 見性, poetry is the *something* that we *see*, but the *seeing* and the *something* are one; without the *seeing* there is no *something*, no *seeing*. There is neither discovery nor creation: only the perfect, indivisible experience.  
- p84

鈴木大拙は、西洋的知性・思想の根底には、我と人・自分と世界・心と物というように、全てを相対的なものとして考える「二元性」があるとよく言う。この二元論は、個々特殊の具体的事物を一般化し、概念化し、抽象化するという長所を持っていて、これが近代科学、近代的大量生産の基礎をなしているが、これに対して、東洋的なもの見方には「主客未分化」「相対以前」、荘子の「混沌」老子の「無状の状、無象の象」の発想があるというのだ。さまざまな人類の抱えている問題は、そこへ立ち返り、「相対的価値観」を超えなければならないという大拙の持論<sup>22</sup> をブライスはこのような形で敷衍したものとされる。この相対時する概念を別々のものとして捉えるのではなく、二つで一つだという考え方は、晩年のブライスの著作のなかにも書かれている。禅が絶対の境地を求めることについて以下のように述

<sup>21</sup> 鈴木大拙著・上田閑照編『新編 東洋的な見方』所収 岩波文庫 1997 111 頁

<sup>22</sup> 鈴木大拙著・上田閑照編『新編 東洋的な見方』岩波文庫 1997 この中の論文「東洋文化の根底にあるもの」「東洋的な見方」等参照

べている。

In any case, what we desire is not so much a warm universe, nor even a whole, one; what a man wants, is what he is offered, not the single absolute, nor the single relative, but the single two-in-one. Zen is when he takes what he is offered, and knows what he really wanted, which is, if the printer can manage it, the *raeblsoaltuitvee*.<sup>23</sup>

もう一つの例で大拙の見方がブライスに与えた影響を見たい。

The butterfly  
Resting upon the temple bell,  
Asleep.  
釣鐘にとまりてねむるこてふかな 蕪村

この句の鑑賞をブライスは次のように書いている。

The surroundings, the historic associations, the quiet sunshine have calmed the mind, emptied it and prepared it for this slight thrill of surprise at finding a butterfly in such an unlikely place. The colour ( supposing it to be a white butterfly, the commonest,) the delicacy, the lightness, the feeling that it may be gone the next instant all this is brought out in contrast with the dark colour, the weight, solidity, rigidity of the massive bell. *And this is all.* - p245

鈴木大拙の鑑賞の仕方は次のようだといって、この文のすぐ後に、次の文を紹介している。

The haiku is not merely descriptive, it is of religious connotation. Human life after all is not any better than that of the butterfly; it gains its meaning only when it is connected with

<sup>23</sup> *Zen and Zen Classics* p23

something far more enduring and all-sustaining. The playfulness, however, Buson the poet had in mind comes from the butterfly's utter unawareness of any sudden event which may shake the very foundation of its existence.

つまり蕪村は、やがて僧が正午の鐘を鳴らすべくやって来るのを計算してこの句をつくっているのだ。何も知らずに羽を休めている蝶は、突然打ち鳴らされる恐ろしい鐘の響きに驚かされるにちがいないことを言外に詠み込んでいるのだ。

This kind of uncertainty always clings to all forms of life. Man tries to avert it by so-called science, but his greed asserts itself, and all scientific calculations are upset. If nature does not destroy, man destroy himself. There is great deal of philosophy at the back of this epigrammatic utterance of Buson.<sup>24</sup>

この文では、人生を常に襲う不意の出来事がこの句に詠みこまれていることについて述べているが、戦後「東洋思想の特殊性」という題で講演をした時もう一度、この俳句の話をしていて、その時にはこう言っている。「やがて坊さんが出てきて、その釣鐘をゴンと鳴らすことはきまっている。そしたら蝶はあわてて飛び上がらねばならぬ。しかしそれに気がつかないでか、またはそんなことを超越してか、天地に悠然としておる蝶のうちに見られるですね。」ここでは、不意に襲うアクシデントに対する科学の力の非力なことを論じている前者とは少しニュアンスが異なり、アクシデントが起こるその瞬間まで「超然」として、「天地に悠然としている」蝶の姿に焦点を当てて語っている。先にも述べた、西洋思想と科学の発達についての大拙の考えが前者に出ているものと思われる。これをうけて、ブライスは大拙のこの蕪村の句に対する評釈に次のような注をつけている。

What he should have said of Buson's haiku, is what he says of "A Fishing Boat," by Baen. Mere

suggestiveness, to my mind, is not enough to describe this. The idea of "All in One, One in All" must be recognized here. When an object is picked up, every thing else, One and All, comes along with it, not in the way of suggestion, but all-inclusively, in the sense *that the object is complete in itself.* (Blyth's italics) - p246

このことは、ブライスが大拙の禅から学んだことの一つであろう。*Zen in English Literature* の第一章のタイトルとなっている Religion is Poetry での考え方もこれと同じである。

To the religious, all things are poetical eating, drinking, sleeping, going to the lavatory not one more than another. To the poetical, all things are religious, every blade of grass, every stick and stone, the butterfly and the intestinal worms. The surgeon and the doctor achieve this condition in their own sphere. To them no part of the body is clean, no part is dirty, all have equal interest. To the musician there is the same universality of outlook; the second violin is just as important as the first, the drum and the piccolo no whit inferior to any other instrument. - p33

いかにもブライスらしい説明である。詩と宗教は背と腹のようなもので、二つで一つなのである。そしてそれも、ごく日常的なつまらぬもの、こと(常識的に言えば)までも含まれている。

以上述べてきた例は馬遠、蕪村と東洋のものばかりで、*Zen in English Literature* という書名にはふさわしからざる例かもしれない。正式にはこの本の名前は *Zen in English Literature and Oriental Classics* なのだから、洋の東西を問わずブライスは詩や小説を禅の観点から取上げているのだ。最後にエッカーマンの例をとりあげてみたい。ディッケンズの小説の一場面やスティヴンソンの寓話などが禅の説明に使われているが、ここでは長さの都合で、イギリス人でないところが残念ではあるがエッカー

<sup>24</sup> 鈴木大拙の *Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture* p263 から引用したとブライスは書いている。

マンを例に選んだ。 *Conversations with Goethe* の中の 1830 年或る日の出来事である。

I was much struck by a Savoyard boy, who turned a hurdy-gurdy, and led behind him a dog, on which a monkey was riding. He whistled and sang to us, and for a long time tried to make us give something. We threw him down more than he could have expected, and I thought he would throw us a look of gratitude. However he did nothing of the kind, but pocketed his money, and immediately looked after others to give him more. - p 6

何がエッカーマンの心を動かしてこの出来事を書き留めさせたのかということ考えた時、この少年の感謝を知らない態度ということ、先ずは誰でも思い浮かべるにちがいない。しかし、ブライスはそうではないと言う。

It was the complete absorption of the boy in the work he was doing to get money. Other people had no existence for him.

というのだ。それから 3 日後また同じような例をエッカーマン は書き留める。それはあるホテルのレストランで目撃したことである。200 人位の客を相手に、全部を一人で捌いていく給仕長の活躍ぶりである。

It seems almost incredible when I say that nearly the whole of the attendance was performed by the head waiter, since he put on and took off all the dishes, while the other waiters only handed them to him and received them from him. During all this proceeding, nothing was spilt, no one was incommoded, but all went off lightly and nimble, as if by operation of a spirit. Thus, thousands of plates and dishes flew from his hands upon the table, and again from the table to the hands of the attendants behind him. Quite absorbed in his vocation, the whole man was nothing but eyes and hands, and

he merely opened his closed lips for short answers and directions. Then he not only attended to the table but took the orders for wine and the like, and so well remembered everything, that when the meal was over, he knew everybody's score and took the money. -

p 7

エッカーマンはこの給仕長を "comprehensive power, presence of mind and strong memory" と呼んでいるが、ブライスはこれこそ、禅の素晴らしい例であると言う。ブライスはこれを "presence of Mind" または "absence of mind" とよびかえている。絵描きが筆に全神経を集中し、彫刻家が鑿に全神経を集中しているのと同じで、禅の要諦は unconscious, unselfconscious, even unSelf conscious - p 9 であるといっている。

unselfconscious と unSelfconscious をどう訳し分けたいのかかわからないが、ある一点に意識が集中していて、雑念が排除されている状態をいって、いわゆる <無我夢中> <無心> <無我の境地> を指し、それをブライスは "This is a splendid example" といっている。

ここで、給仕長の方はともかくとして、サボワの少年が礼を言うのも忘れるほど、金を稼ぐことに熱中していることも禅といえるのかという疑問がおこるが、しかしこれもまた禅の考えでは、物事に優劣をつけたり、価値に上下をつけたりしないということの表れであるらしい。ブライスは

A thief running away like mad from a ferocious watch-dog may be a splendid example of Zen. - p5

とも言っている。鈴木大拙も禅の知識の体得の仕方を、大泥棒が息子をわざと窮地に陥れる方法を取ったことを例に述べているのを読んだことがある。

One thing is as good as another in this world. This states the absolute value of everything; all things have equal value, for all have infinitive value - p22

ブライスは *Zen in English Literature* で、あらゆる詩的なもの、小説、音楽、美術などに禅の精神が読



取れることを指摘し、禅の精神との共通性を見ようとした。例えば、ディッケンズ、ステイーヴンソン、エックハルト、ゲーテ、セルヴァンテス、ワーズワース。その間に散りばめられているシェークスピア、『方丈記』の言葉、ゲーテ、ミルトン、ジョンソンなどの詩の断片。俳句の数々、漢詩さらに『禅林句集』『孟子』『荘子』『論語』そして『聖書』。ブライスの博学な知識に追いつけず、それらの引用がどう繋がっているのか理解できない所が多々あった。今ここでは、大拙との関連が比較的わかりやすい所を取上げた。

### 3 ブライスの生涯を貫いているもの

前にもふれたが、ブライスは太平洋戦争が始まる一年前に朝鮮から日本へやってきて、金沢の四高に職を得た。しかし戦争が始まったその日から、神戸の交戦国民間人抑留所に収容され、終戦までの四年間をここで過ごしたということは、前にも述べた。この収容所での生活は詳しくは分らないが、6人の相部屋で、彼は終日ベットの上で俳句や川柳の研究、執筆に取り組んでいたということである。<sup>25</sup> その成

<sup>25</sup> この収容所内での監視体制や食生活、衛生状態など具体的には何もわからない。しかし資料をいろいろ探すうちに、『証言 第二次世界大戦実話 福島にあった秘められた抑留所』という本を見つけた。この本は、福島民友新聞社の記者紺野滋が昭和46年、当時の収容施設関係の生存者や遺族を尋ねて資料を収集した貴重な記録である。インド洋上でドイツ海軍の特殊艦によって沈没されたイギリスの客船乗員140名が日本に連れてこられて、福島のノートルダム修道院に極秘のうちに収容されていた。女・十数人の子供も含まれ、中にはドイツの軍艦で生まれたばかりの赤ん坊もいた。これを読むと、特高の監視下でどのような扱いを受けたか、食料事情、衛生状況などよくわかる。福島のこの収容所の場合は市民には極秘にされていたが、日本人の何人かは食糧調達や医療などで関わりをもっていた。なかには、俘虜と心の交流が生まれたこともあった様子もよく分る。

紺野滋『秘められた抑留所』1991年8月発行 歴史春秋出版株式会社

『外事警察概況昭和17年版』によると、日本国内では昭和17年に警視庁抑留所、神奈川、兵庫、長崎、埼玉、北海道の7抑留所があり、あわせて670人が収容されていたそうである。この他17年にアリュウシャン列島アツツ島の現地住民40人を収容する施設を北海道に、グワム島作戦による132人を収容する施設が兵庫県の第3、第4抑留所として開設された。(このグワム島から連れてこられた132人の

果は戦後 *Haiku, Volume* , , , , *Senryu* となって戦後北星堂から相次いで出版された。

終戦直後、職を捜すため上京したブライスは学習院院長山梨勝之進<sup>26</sup>を訪ねた。山梨勝之進は大拙と親しい仲であった。ブライスは、一方GHQのCIE(民間情報局)にいたH.G.ヘンダーソンを訪ねていった。彼は *The Bamboo Broom* の著書で、戦前から俳句の紹介者として知られていた。ブライスは彼からGHQの知日派の人々に紹介された。この二つの人の繋がりから、ブライスは宮中とGHQの連絡係となって奔走することになった。天皇が戦争責任を問われる事態になることを恐れ、天皇制存続を危惧した山梨勝之進はブライ스와相談して昭和天皇の神格否定の詔書を出す計画を立てた。ブライスはヘンダーソンに相談を持ちかけ、ヘンダーソンが書いた短い文を核にして、英語で草稿を書いた。山梨の手を経て宮中に持ち込まれ、幣原喜重郎首相・吉田茂外相他何人かが目を通して若干の付け加えが行なわれ、最後に天皇自身の発案で五箇条の御誓文が冒頭に置かれた。そして昭和21年元旦「年頭の詔書」として新聞紙上に発表された。これが世に言われている昭和天皇の「人間宣言」である。

当時の新聞をみると、朝日新聞の見出しは「年頭、国運振興の詔書煥発」「平和に徹し民生向上 思想の混乱を御軫念」となっている。「茲二新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク・・・」と、漢文調の天皇詔勅語に翻訳されている。また同時に掲載された幣原首相の「謹話」は、明治天皇の「聖旨を奉戴」して新日本を建設することを強調していて、天皇の神格否定など何処にも触れていない。

ブライ스가主として書いた英文の方は海外向けで、大変評判が良かったらしい。しかし、日本国民は以

中にR.エイトケンがいて、昭和19年にブライ스와巡り合うことになる。

<sup>26</sup> 山梨勝之進(1877 - 1967)海軍提督。1921(大正10)ロンドン軍縮会議で加藤友三郎の腹心として活躍。条約派の智将とよばれた。1930(昭和5)年のワシントン会議でも事態解決に努力したが、以後主流派からはずされ、退役し学習院院長として皇太子の教育に当たる。天皇の信任も篤かったといわれている。

来この難解な詔書を実際に読むことも少なく、昭和天皇の「人間宣言」というマスコミ言葉だけが独り歩きをしてきたように思う。ブライスは黒子に徹したため、日本人から、「ああ、あの有名な昭和天皇の人間宣言を書いた人」という親しまれ方をすることもなかった。ブライスは天皇が神の立場を降りることが、平和な民主主義国家の建設には何よりも大切だと思って書いたにちがいない。だから英文で読んだ人々は、この詔書を天皇の「人間宣言」と取ったのだ。新聞が見出しに取上げ強調したような、過激な思想や道德の混乱をブライスが心配してこれを書いてわけではないと思う。この部分は宮中側の付け加えであろう。

The devastation of war inflicted upon our cities, the miseries of destitute, the stagnation of trade, shortage of food, and growing number of the unemployed are indeed heart-rending. But if the nation firmly united in its resolve to face the present ordeal and to seek civilization consistently in peace, a bright future will undoubtedly be ours, not only for our country, but for the whole humanity.

このような部分にこそブライスの願いがはっきり表れていて、これまでの天皇は神聖にして冒すべからざる存在だったことを否定しなければ日本は生まれ変わることはできないと言う固い決意が書かせたものとおもう。しかし天皇の側の中途半端な天下りで、ブライスの真意は国民には伝えられなかった。

ブライスは学習院大学に職を得、同時に皇太子の家庭教師となった。彼はこの他数校で教鞭をとり、なおかつ英文学、俳句、川柳、禅などに関する膨大な著作を残した。上田邦義教授の作られた R.H. Blyth Bibliography with Quotations<sup>27</sup> によれば戦後 38 冊・単純に頁数を合計すると 6000 頁を優に越える膨大なものとなる。

<sup>27</sup> Kuniyoshi MUNAKATA, R.H. Blyth Bibliography, *Reports of the Department for Liberal Arts, Sizuoka University* (Vol.8) March, 1973

移動の時間もままならないほど過密な掛け持ちの授業をこなしながら、これだけ著作がどのようにして書かれたのかと驚くが、それだけではない。1963 年には二階建ての家を独力で建てたという。まだ学生だった上田教授はその家に招かれた時の思い出を次のように語っている。

When I visited his home, I felt it was very Blyth-like that he had built his house with a big living tree growing in the middle of a room, up through the floor and out through the roof into the sky. <sup>28</sup>

今様良寛の住まいだ。この大磯の家でブライスはオルガン、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、フルート、リコーダー、オーボエ、クラリネットなどいろいろな楽器を自ら演奏し音楽を楽しんでいた。バッハを最も愛していたという。

遺作は *Zen and Zen Classics* であった。先に挙げたブライスの Bibliography によれば全部で八巻になる予定であったらしいが、*Volume One*, *Volume Seven*, *Volume Two* までが生前に出版され *Volume Four* が三年後、*Volume Three* は七年後に出版されている。私が 2000 年の 12 月に北星堂書店に注文した時には、*Volume One* と *Two* の二巻のみしか入手できなかった。他の巻は在庫切れと言うことであった。奥書を見るとどちらも昭和 57(1982) 年が最後の版で *Vol. One* が 11 版 *Vol. Two* が 6 版重ねたことを示している。*Zen English Literature* 程には読まれていないのだろうか。

*Volume One* と *Zen in English Literature* の第 1 章がともに "What is Zen?" であることを私は面白く思った。禅について何も学んだことのない私は、先ず *Zen in English Literature* を読んで「禅とは何か」を学ぼうと思った。しかしそこに挙げられている例が、なぜ禅なのかの理解に苦しんだ。そこで *Zen and Zen Classics* の方を読めば補ってくれ

<sup>28</sup> Edited by Kuniyoshi Munakata and Michael Guest *Essentially oriental R.H. Blyth Selection*,

るのではないかと期待したが、こちらは尚一層難解であった。Volume One の Preface の書き出しはこうである。

The reader of this book will be confused by it, but this is the destiny of man, since many are the roads, but all lead to the same conclusion, confusion.

彼の予測どおり、*Zen in English Literature* との論調のあまりの違に、私は混乱してしまった。更に続けて、

... But that does not mean that we are not to smash it flat if we get the slightest opportunity. And we are not going to attack foxy (false) Zen, or the hypocrites and time-servers who support it, but Zen itself highest and sublimest forms.

ここで野狐禅と呼ばれている禅は何を指すのか、それを支える偽善者、無節操な人々とは誰を指すのか。こんなことが前書きに書かれている禅とは何だろうか。眼で見えないものこそ真に実在するものであり、それを見抜く力は「悟り」や「直観力」であるとして、禅では直観力を重んじている。その“直観”についても前書きの中で、次のように言って、当てにならない、あぶなっかしいものだと言うのだ。

Nothing is sacred but one's own foolish and contradictory intuitions. By "intuition" is meant here that which I myself find in its with all so-called "great men" without exception, and with a good many "little men". It is thus purely subjective, dangerous, and indeed variable...<sup>29</sup>

本来無一物、無執着、自我の超克、主体客体の区別なし、これら禅の論理を *Zen in English Literature* では絶賛していた。それならば、次のような文はどう読めばいいのだろうか。

The logic of the Zen would seem to be this. I

am nothing. I have no special wants or wishes, no particular desire for the things of this world. But you want them, and I am you, so I want them, for you. Of course we might take it the other way round. I don't want comfort, and I am you, so you don't want it, and why should I help you to get what you really and truly don't want? - P21<sup>30</sup>

この文は、禅の言葉を自分に都合の言い様に組み合わせれば、こんな論理も成り立つし、全く逆の論理もなりたちうるというのだと、禅の論理を冷やかしていると思えない。まさに“無我”はその場その場で都合のいいように、あっちにでもこっちにでもつき得るということではないのか。これはあきらかに禅の論理に対する揶揄である。ここから禅の無我(selflessness)の利己的な(selfish)面が浮かびあがってくるという禅批判だ。

ブライスの禅批判で私が一番戸惑ったのは、次の下りであった。

Have we a right to object to the universe? But if I am the universe, how can the universe object to itself? Man is the eye with which the universe sees itself, and it is free to spit in its own eye if it so desires. And I do spit, with a scornful regret, in my own eye. This spitting is not something individual, but universal and historical. - p13

宇宙、宇宙に異議を申し立てる権利、私は宇宙、自分の眼に唾を吐く、これらは何を意味しているのだろうか。宇宙には世界中のあらゆる物が全体として緊密につながりあって生きているところだ。この宇宙全体の網の目のように繋がった命の連鎖を知らず、他の生き物の命を傷つけたり奪ったりすることに対して烈しい憤りを込めた文ではなかろうかと解釈してみた。今でこそ、生態系や食物連鎖は多くの人の共通の認識となってきたし、世界の一地方の出来事も地球市民として受け止められるようになってきた。ブライスがこれを書いた当時は、まだ水俣病は一地方の奇病に過ぎず、窒素工場の環境破壊による

Preface p xii

<sup>29</sup> *Zen and Zen Classics Volume One*, Preface

<sup>30</sup> 以下 *Zen and Zen Classics, Volume One* については頁数のみ引用文末につける。

ものだという認識はなかった。1952(昭和27)年まで広島・長崎の原爆の実態さえ日本人は知らされていなかった。GHQ が原爆の恐ろしさ、残虐性を伝える報道を禁止していたからである。そしてすでに1952年には、アメリカは原爆の600倍の威力を持つ水爆の実験に成功していた。太平洋戦争が終わって間もなく、昭和25年には朝鮮戦争が始まり、特需景気に沸く日本は金と物だけを追い求めはじめた。再軍備の道もついた。

The world is becoming less and less poetical every day. WHAT IS THE BLESSING IN THAT? ... If all men lead mechanical, unpoetical lives, this is the real nihilism, the real undoing of the world, to which Dante's Hell is but a fairy story. The universe is becoming a blackboard with no chalk. - p13

In other words, Zennists should never get off their absolute horse at all: they should never argue or explain, only assert. To jump back on the horse as soon as their feet are blistered is unfair. - p15

これらの、ユーマアを含んだ強い批判的な言葉は禅が独り悟りを求め、世界中で戦争や飢えや病で苦しんでいる人々がいるが、それらの問題を高みから眺めているだけだとしたら禅とはいったい何だろうという疑問から発したものではないだろうか。

Bibliographyによれば、*Zen and Zen Classics Volume Seven*の献辞はこうなっている。

This is dedicated, as all this books have been, to Suzuki Daisetz, / The only man who can write / About Zen / without making me loathe it.

それにしても何故これほどまでに禅に批判的になったのだろうか。ブライスは自分自身のことを語ることの少ない人であったらしいが、本当に短い自伝的な文を60歳になる少し前に書いている。<sup>31</sup> このなかに自分の人生を導いてきた "inner destiny" と

も呼ぶべき物が二つあるが、それは子供のときからのアニミズムと菜食主義である。それが自分を仏教に導き、禅、俳句、川柳の道へと進むことになったと言っている。私はブライスにはもう一つの "inner destiny" があつたと思う。それは「殺すなかれ」の絶対平和主義である。命あるものを食べない菜食主義もそこからきているし、十八歳で徴兵拒否を断行し牢獄で二年間を過ごしたのもそこからきている。しかし、殺生戒を守るべき仏教・禅宗が、軍国主義と容易く結びつき、「死ぬことに動じない」「我執を去って戦場で自由無碍の戦いをする」「利己心の滅却によって天皇のため滅私奉公できる」などと若者達に説いて戦争に協力した。そのことを、植民地満州で、捕虜収容所のなかで見聞きしていた。そして戦後反省の言葉がないどころか、糊塗しまった宗教界に絶望し、このことがブライスを禅批判に向かわせたのではないだろうか。

そもそも禅が "Zen transcends morality" "we become moral by becoming ego-less" など "無我" に最高の価値を置くところに問題があるのではないか。"無我"こそ思想的節操のなさや主体性のなさの原因なのではないのかと、ブライスは禅を批判している。ブライスは、禅の禁欲主義もしばしば批評の対象としていて、禁欲主義者たちは、初めから何も愛さない、空っぽで干からびた人間なのではないかと痛烈なことをいう。

A deep love of poetry, of nature, of music will make a man correspondingly indifferent to money, fame, power and all the other things that Buddhists and Christians without this love inveigh against. - p17

ブライスは生涯詩を愛し、バツハと音楽を愛し、自然を愛し、芭蕉を愛し、心豊かな人生を送ることを願った人だ。心豊かな人生を送るための禅であったはずなのに、戦争を肯定した禅は許せなかった。三つの inner destiny は生涯変ることなく、ブライスは最期まで平和を強く願う人であった。

<sup>31</sup> James Kirkup, *The genius Haiku Reading from R. H. Blyth on poetry, life and Zen* THE BRITISH HAIKU

From Starry Sky Scans:

I'll make it so your body's unable to forget mine.

Saijou Takato's 5 year reign as the "Most Huggable No. 1" has been snatched. Stealing his thunder is the newbie actor with a 3-year debut, Azumaya! Towards the stuffy hostile Takato, Azumaya's sincere sparkling smile starts to become effective. Even as Takato sets his alert level on MAX, Azumaya catches Takato in his shameful drunken state and uses it to blackmail him! In exchange for Azumaya's silence, Azumaya states, "Please let me hold you"?! &quot; Start by marking "Kare no Shousou to Koi ni Tsuite" as Want to Read: Want to Read saving... Want to Read. See a Problem? We'd love your help. Let us know what's wrong with this preview of "Kare no Shousou to Koi ni Tsuite" by Sari Aomoto. Problem: The wrong book The wrong edition Other. Judar No Oukan - Senichiya Ni Oborete Manga: First story of the Throne of Judar series From fictiondb: She'd conceived his child and ran But there was nowhere Carmen could hide from this prince of Judar. No stone he wouldn't turn to find her, no wall he couldn't tear down. Nothing would stop Farooq Aal Masood from claiming the mother of his baby. She had betrayed him. And she would pay. In his bed. As his wife...until he tired of her. And though Carmen professed to love him, that it was all a misunderstanding, well...Farooq would never fall for her lies again! Other names: Reincarnated as an Aristocrat with an Appraisal Skill, "The Aristocrat with an Appraisal Skill" Author(s): Miraijin A. Genre(s): Adventure Fantasy Shounen. Status: On Going. Magazine: Magazine Pocket. : 709145. Bookmark.